

パリの喜び ～フランスバロック音楽の夕べ～

ジャック・マルタン・オトテール “ローマ人” (1673年～1763年)

組曲第3番 作品2の3

アルマンド “サン・クルーの滝” ～ サラバンド “ラ・ギモン” ～ クーラント “つ
れない女”

～ ロンドー “嘆き” ～ メヌエット “可愛い子” ～ ジーグ “イタリア女”

ミッシェル・コレッテ (1707年～1795年)

ソナタ第4番 作品13の4

ラルゴ ～ アレグロ ～ アダージョ ～ アレグロ

フランソワ・クープラン (1668年～1733年)

プレリュード イ長調 (クラヴサン奏法より)

ジャック・オーベール (1689年～1753年)

ソナタ第4番 作品2-4

アダージョ ～ アルマンド ～ アリア ～ プレスト

休憩

ジョセフ=ボダン・ドゥ・ボワモルティエ (1689年～1755年)

組曲第5番 作品35-5

プレリュード ～ ロンドー形式のブレー ～ ロンドー ～ ファンテジ ～ ジーグ

マラン・マレ (1656年～1728年)

組曲 イ短調 より (ヴィオール組曲集 第3巻)

プレリュード ～ アルマンド ～ サラバンド ～ グラン・バレ

ジャン=フェリ・ルベル (1666年～1747年)

ソナタ 第11番

リコーダー / 辺保 陽一

ヴィオラ・ダ・ガンバ / 譜久島 譲

チェンバロ / 脇田 美佳

パリにおけるフランスの組曲とイタリアのソナタ

17世紀後半パリ郊外のヴェルサイユ宮殿では、太陽王ルイ14世の寵を受けるイタリア人舞踏家兼ヴァイオリニスト、ジャン・バティスト・リュリがフランス風オペラ“コメディ・バレ”を創始する。バレ（舞踏）と合唱が重視されたリュリのヴェルサイユスタイルは、イタリア・オペラとは異なった宮廷風の優雅で荘厳な雰囲気に着目。当時フランスでは、ようやくロッシやカヴァッリなどによる有名なイタリアオペラが上演され熱狂的な喝采を受けるのだが、同時に『粗野な芸術』とも批判され容易に受け入れられる状況ではなかった。

しかしながらリュリの死後、器楽の世界ではフランス風スタイルである舞曲中心の組曲などに一石を投じるべく、1693年にヴェルサイユ宮殿礼拝堂オルガニストとなったフランソワ・クーペランがイタリアを始めとしてヨーロッパ各地で流行していたアルカンジェロ・コレルリのトリオ・ソナタのスタイルで作曲した。クーペランの策略は見事に成功し、ヴェルサイユ宮殿を始めとしてパリに少しずつイタリアのソナタ形式が浸透していく。今回演奏される曲は、いずれも当時のパリで活躍した作曲家によるものであり、フランス芸術の変遷にとっても貢献した人物たちである。それぞれの作品を時系列を踏まえて聴いてみると、フランスの流行の移り変わりがよく見て取れる。

楽器の製作家家系でも知られるジャック・マルティン・オートテールは、“ローマ人”と称されるように生粋のパリ人でありながらローマに留学し、伝統的なフランスのスタイルを守りつつ音楽には積極的にイタリア風の装飾やハーモニーを取り入れている。ミッシェル・コレッテはオルガニストで、今回の作曲家の中で一番遅くに生まれた人物となる。コレッテのソナタ第4番は、コレルリの形式である『緩 - 急 - 緩 - 急』の教会ソナタとなっている。

フランスバロック期鍵盤音楽の大家フランソワ・クーペランは1717年にクラヴサン（仏語でチェンバロの意）奏法を出版し、チェンバロ奏法の運指やフランス風装飾などについて解説し、大バッハなど後の多くの作曲家に多大な影響を与えた。ジャック・オーベールは当時の素晴らしい舞踏家であり、そしてヴァイオリニストであった。ソナタ第4番のアリアでは、その卓越した技術を垣間見ることが出来る。

ボワモルティエは愛好家に100を超える作品を残した多作な作曲家であり、その多くはパリで出版され人気を博していたと考えられる。作品35は6つの組曲から成り、美しい装飾が施されたプレリュードや様々な舞曲などを含む。彼はフランスとイタリア趣味を見事に折衷しており、その音楽には『華』があり聴くものをたちまちに魅了する。

マラン・マレは、ルイ14世お抱えの宮廷ヴィオール（ヴィオラ・ダ・ガンバ）奏者であった。その卓越した技術は作品にもよく反映され、特にこの組曲のグラン・バレはヴィオールの可能性をいかんなく発揮した名曲である。最後を飾るジャン＝フェリー・ルベルはリュリに学んだヴァイオリン奏者であり、オペラ『四大元素』で有名な作曲家である。彼のソナタは楽章間が繋がった珍しい形をとっている。中間部の壮大なシャコンヌは短い循環するコード進行の中で上声様が様々に形を変えていく変奏曲の一種で、ヴィルトゥオーゾ且つ悦びに満ち溢れる素晴らしい作品となっている。